

---

# 毎日三枚小説『灰色の笑顔』

藍田いずる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

毎日三枚小説『灰色の笑顔』

### 【Nコード】

N8287F

### 【作者名】

藍田いずる

### 【あらすじ】

アメリカ人ハーフのカイとバーに來た女子高生の話。

「なあ、草はあるんだろ？」

擬似煙草を吹かして僕はマスター・ジョンに聞いた。ブランデーとカクテル用の氷を割っていたジョンはアイスピックをカウンターの上に置いた。

「草か？ もちろんだ。入り口をでて駐車場まで行けば簡単に手に入れられる。駐車場の掃除にもなるから大歓迎だよ」

腰に手を置いてジョンは入り口に首を向けた。

「いらつしやい」

思わず僕も振り向く。視線の先にはセーラー服の女がいた。雨に濡れて髪の毛から雫が垂れていた。無言のままカウンターに着くとガサガサとスカートのポケットから五百円玉を出して「ビール」と一言言った。ジョンは僕に一度だけ目を合わせたが何も言わないままジョッキにビールを注ぎ始めた。ふと彼女の横顔を見るとジョンが僕に目を合わせた理由が判った。彼女は前髪で顔の表情を隠していたが唇の端が切れて血がプツクリと膨らんでいた。

僕は自分のビールを飲み干しカウンターの空になったジョッキを置いた。

「傷薬か何か渡そうか？」

少女の目の前にジョッキとつきだしを置くとジョンは聞いた。少女は顔を上げてジョンを睨んでいた。同情や気持ちが判った振りはして欲しくない。そう言いたげだった。初めてこの店に来た時は僕も思ったことだ。

そういえばあの日も鬱陶しい灰色の雨が降っていたなと僕は思う。米軍基地内にある飛行場の進入灯台が空を赤く染めていてその明かりがとても憎かった。基地の外柵に沿うように続いている国道を歩きながら、僕はもはやどこに行きたいのかも判らなかった。そして僕は鉄格子の先にある米軍基地を眺めるのを辞めて、わずかでも温

まれる場所を探し始めた。行き着いた場所がこのバーだった。

彼女は暫くビールに浮いた泡を眺めていた。

「今日も雨が降っているんだね」

新しいジョッキを僕の前にだしてジョンは言った。

「最近じゃ夕立が多いから米軍基地の飛行機も速めに飛んで速めに帰ってくるらしいよ」

ビールを一口飲んで僕は立ち上がる。

「通りで最近軍人達がココに来るのも速い訳だ」

バッグの中からメンバー募集の張り紙を出してバーの入り口に向かう。大きなメッセーじボードがあつて、そこには様々な募集がある。バンドのメンバー募集から外国人専用のデリヘルや犯罪の臭いのするものまでそこには雑多な張り紙が張つてある。僕は以前自分が張つた張り紙を剥がし新しい紙を貼り付けた。以前の紙にも気になつた人ように連絡先の部分を切り取れる様に作っていたが、一枚も破られていなかった。

「ねえ、どうして素行の悪い米軍たちに迎合するの？」

ビールをすすりながら彼女は言った。

「バンドのメンバーを募集してるんでしょ？日本人がロックを歌つたつたって笑われるだけじゃないの？」

僕は笑みを浮かべてそうだねと言つた。僕が席に戻る途中で彼女は僕の容姿に気づき声を上げた。

「あなた、アメリカ人なの？」

半分驚いたような表情を浮かべる。

「日本人からもアメリカ人からも外国人さ」

「こいつはハーフなんだよ」

ジョンが付け加え、彼女はゆっくりと頷いた。僕の言いたい事がわかつたのだらう。

「あなたも大変なのね」

二杯目のビールを飲みきると彼女はホットコーヒーを頼んだ。僕も席について同じものを頼む。

「あなたの父親もやっぱり基地に住んでいるの？」

「以前は住んでいたよ。でも徴兵の期間が過ぎたら帰って行った。だから僕は父の顔を全然知らない。君は僕の姿を見て怖いと思うか？」

彼女はゆつくりと首を振る。

「いいえ、捨てられた子犬みたいね」

マスターは笑った。

「捨てられた子犬か。狂犬だったはずなんだけどな」

マスターが笑ったのは以前の僕を知っているからだ。僕が怖がられていたのは、当時の基地民間利用についての論議が過熱していて、そんな時に三件の婦女暴行の事件と死体が発見させた事があったからだ。その事件が起きた時僕は丁度高校に進学するときだったから、他の生徒たちは僕のことを目の色変えて見ていた。だから日本人でも外国人でもない僕は次第にこの店のように入り乱れて朽ちていった。アルコールや煙草や外人特有の臭いに混じって僕は暮らしていた。

「君は歌は歌えないのか」

じつと彼女は動かないまま厨房の奥を見つめていた。ジョンがコーヒーをドリップして僕と彼女の目の前にだす。

「コーヒーって一人前ずつ作るものかと思っていたわ」

熱いコーヒーを彼女は啜るように飲み下す。

「私を助けてくれたらやつてもいいよ」

「なら、いいさ。俺はただ歌いたい奴を探しているだけだからな」  
ふと仕事を終えた軍人達が英語で冗談を言いながら店に入ってきた。彼女は途端にうるたえたように視線を走らせコーヒーも飲みかけのまま立ち上がった。

「ごめんなさい。私、帰らなきゃ」

軍人達の声に彼女の言葉は掻き消えた。彼女は席を立ち入り口の扉を開く。振り向いた彼女は灰色の笑顔を見せて暗くなった雨振る路上に消えていった。

ジョンは彼女のコーヒーを下げながら言った。

「良くある事だ。でも追いかけたらお前の抱えている何かの解決の糸口になるかもしれないよ」

自分のバッグを手に取り僕は走り出していた。暗い夜の帳をどこまでも走って行った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8287f/>

---

毎日三枚小説『灰色の笑顔』

2010年10月8日15時17分発行